

## 宗教とは何か（1）今井館聖書講義（1）

### 1. 聖なる、落ち着いた生活—パウロの宗教観

（1997年1月19日）

讚美歌 312、495

聖書 テロニケの信徒への手紙 1 4:1 - 12

さて、兄弟たち、主イエスに結ばれた者としてわたしたちは更に願い、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを、わたしたちから学びました。そして、現にそのように歩んでいます。どうか、その歩みを今後も更に続けてください。わたしたちが主イエスによってどのように命令したか、あなたがたはよく知っているはずです。実に、神の御心は、あなたがたが聖なる者となることです。すなわち、みだらな行いを避け、おのおの汚れのない心と尊敬の念をもって妻と生活するように学ばねばならず、神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならないのです。このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしてはいけません。わたしたちが以前にも告げ、また厳しく戒めておいたように、主はこれらすべてのことについて罰をお与えになるからです。神がわたしたちを招かれたのは、汚れた生き方ではなく、聖なる生活をさせるためです。ですから、これらの警告を拒む者は、人を拒むのではなく、御自分の聖霊をあなたがたの内に与えてくださる神を拒むことになるのです。

兄弟愛については、あなたがたに書く必要はありません。あなたがた自身、互いに愛し合うように、神から教えられているからです。現にあなたがたは、マケドニア州全土に住むすべての兄弟に、それを実行しています。しかし、兄弟たち、なおいっそう励むように勧めます。そして、わたしが命じておいたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい。そうすれば、外部の人々に対して品位をもって歩み、だれにも迷惑をかけないで済むでしょう。

#### まえおき

オウム真理教事件以来、「宗教」について語られることが多くなりました。また世紀末的閉塞感のもたらす影響でしょうか、オカルトや精神世界に対する興味も大きいようです。「宗教とは何か」という題は少々大げさですが、聖書は宗教をどう観ているかをお話ししてみようと思った理由です。

「宗教」という語は、ラテン語〈**religio**〉に由来するヨーロッパ語の訳語だとされていますが、その原

意は「再読する」、あるいは「結合する」であると言います。すなわち宗教とは、「教義をよく考える」、または「神と人とを、あるいは同信の人を再結合する」の意なのでありましょう（『キリスト教大事典』による）。『広辞苑』を見ますと、「神または何らかの超越的絶対者、或いは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事。また、それらの連関的体系。帰依者は精神的共同社会（教団）を営む」と定義されています。一方、宗教は生と死に関わる教えであり、人はどこから来てどこへ行くか、自分は誰であるかを追求するものとも説明されます。

では聖書は、今回は新約聖書に限りますが、どうであるかと申しますと、実は「宗教、信心」などと訳されたギリシア語は二、三ありますが、宗教については殆ど何も語っていないと言ってよいのです。これに反して、「信仰」という語は数えきれない程使われていることは言うまでもありません。

従って、この話の中で私が誰その「宗教観」と言うのは、これらの人の信仰を語ることによって、彼らの宗教についての考えはこうであろうと、私が（勝手に）思うところを申し述べるものであることをご諒承いただきたいと思います。

### テサロニケの信徒へのパウロの勧め

キリスト教はイエスの死と復活、および聖霊の降臨とともに始まりました。紀元30年頃のことと考えられています。「イエスはキリスト、神の子なり」というこの信仰は、わずか一世代のうちに当時の世界の中心であったローマにまで広がりました。この大事業を成し遂げた中心人物は使徒パウロですが、今朝のテキストは彼の手紙です。

新約聖書にはパウロの名を冠した手紙が13通ありますが、そのうち7通が彼の真正な手紙とされており、「テサロニケの信徒への手紙1」は恐らくその最初のもので、50年頃に書かれたのだろうと考えられています。ということは、これは新約聖書の最初の文書ということになります。ちなみに、彼はこれを始めとして60年代始めの殉教死（とされる）に至る僅か10年程の間に、これらの貴重な手紙を書き残したのでした。

テサロニケという町は現在のギリシアのセサロニキ（英語ではサロニカ）で、当時のマケドニア州の首都でした。町にはユダヤ人の会堂があり、パウロは彼の第2次伝道旅行の折、シラスとテモテという同労者を伴って、この町を訪問、伝道したのです。多分その後に滞在したコリントから書き送られたものでしょう。

今朝はこの手紙の4章1節から12節までを読みますが、新共同訳には「神に喜ばれる生活」という小見出しがついています。ここで「生活」が、極めて聖書的な言葉と言ってよい「歩む」という語で表され

ています（1－2節）。そこでまず、この「歩む」についてこれ以上の注解はないと思われる内村鑑三の文章をご紹介します。

「歩む」とは「静かに歩む」の意である。飛ぶにあらず、走るにあらず、歩むのである。雄飛というがごとき、疾走というがごとき、絶叫というがごときことをなさずして、忍耐をもって神により頼み、その命にしたがって静かに日々の生涯を送ることである。あえて大事業を成さんとせず、大伝道を試みんとせず、大奇跡を行わんとせず、ただ神の命これ重んじ、彼の言これしたがひ、神を信ずるこれ事業なりと信じて、無為に類する生涯を送ることである、信仰の生涯の大部分は忍耐である。静粛である、待望である。神にありて自己に足るの生涯である。また神より何物をも受くことなきも、かれご自身を賜わりしがゆえに、その他を要求せざる生涯である。

（『一日一生』3月27日項）

3節から8節までで大切な語は「聖なる」で、4節の「汚れのない」、8節の「聖霊」を含めて4回出てきます。テサロニケではギリシア世界共通の密儀宗教であるディオニュソスの宗教が盛んで、沃地・地母神の宗教に特有な生殖器崇拜や淫行が行われていたと言います。恐らくキリスト信者になった後も、このような旧習からなかなか脱けきれなかったのでしょう。だからこそパウロは「神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならない」と警めたのです。

9、10節には「兄弟愛」が勧められています。激しい迫害の中にあつたテサロニケの信徒にとって、兄弟愛にまさる支えは無かつたであります。

最後の11、12節が今朝とくにお話ししたいと思っている箇所ですが、そのためにまず「努めなさい」と訳された語の説明をしておきます。これはギリシア語の *philotimeomai* という語で、もともと「名誉（岩波訳）、大志（ambition, 新英語訳）としなさい」と訳すべき語です。それと「自分の仕事に励み」は、むしろ「自分のことをしっかりとやる」という程の意味です。

## ヘレニズム文明と福音

テサロニケはマケドニアの首都ですが、そのマケドニアの王アレクサンドロスの東征によって東西文化の交流が起り、ギリシア語が共通語になり、文化的にはギリシアの浸透、政治的にはローマの支配を通して一つの世界が築きあげられました。このいわゆるヘレニズム文明は、イエスの時代に既に爛熟期に達していたのですが、正にこの時に、この文明の中へ、福音はヘレニスト（ギリシア語を話すユダヤ人キリスト者）でありローマの市民でもあつたパウロに担われて出て行ったのです。

この爛熟期のヘレニズム文明の特徴をなす現象は、（1）性道德の頹廢、（2）人間関係の砂漠化、（3）

宗教の乱立であったと言われます。そして驚くべきことに、パウロの手紙のこの部分（3つの勧め）は、これら三つの現象に実に適確に対応しています。

彼の言う「聖なる生活」は、即物的には性道德に関することです。「みだらな行い」とは当時の宗教的淫行（神殿娼妓との性交渉によって地母神の祝福を得ようとする）を指すものと思われまから、そのような異教社会において福音を知った者がどれ程の戸惑いと葛藤を覚えたか容易に同情できます。「ヘレニズム世界で、多くの宗教の中でもキリスト教が残ったのは、その倫理の厳しさによる」（B・ラッセル）と言われるのも宜なるかなです。しかも「聖なる」とは決して単なる禁欲ではありません。むしろその語の原意のように、聖なることのために「別にしておく」の意です。すなわち性は本来「聖なる」もの、それゆえ聖なる神の祝福として聖別しておくべきものです。それを「みだらな行い」によって自ら呪詛に変えてしまうことがあってはならない、そのことじたいがそれこそ神の「罰」であると、パウロは教えたのです。

次に兄弟愛のことですが、歴史家が「黄金時代」と呼ぶこの時代は、そのまばゆいばかりの光のゆえにまたその影も濃い、暗い時代であったと言います。人々は自ずと利己的になり、その人間関係は急速に砂漠化していったのでしょう。そうした時代に、率直で装わない人間関係を回復し、すべての人間を兄弟と見る平等で包容的な「兄弟愛」の教えは、どんなにか人々の心を癒したことでしょう。それを「マケドニア州全土に住むすべての兄弟に」実行している彼らに、パウロは「なおいっそう励むように」と勧めるのみでした。

ところで9節の「兄弟愛については」という言い方は、「兄弟愛」について彼らから報告ないし質問があったことを暗示させます。テサロニケの信徒の中には、自分の日常生活を放棄してまで、共同体内の奉仕や伝道にかけずりまわり、次第にその生活が他の兄弟たちの助けと世話によらざるをえなくなり、ついには外部の人のひんしゆくを買うという種類の人もあったのではないか。ここでは直接に言及されていませんが、再臨近しと熱に浮かされ、狂躁的信仰にのめりこみ、真面目な労働を放棄して怠惰に陥る人もあったように思われます（テサロニケ二の3：6－15参照）。

信仰は人を動かす力です。信仰に生きる時人は（神のために？）大志を抱き熱心になって、騒がしく動きまわる。静かにしてられず、平凡な日常に耐えられなくなって、狂躁に走る。それを「兄弟愛」のゆえと錯覚することもあるのではないのでしょうか。パウロはそういう人たちに十分な敬意と愛を抱きつつも、そして兄弟愛がキリスト信徒の貴い徳であることをよく弁えながらも、次の11、12節のようなことを勧める必要を感じたのではないのでしょうか。

その勧めとは（彼がすでに彼らに命じておいたことですが）、「落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい」ということです。これは、しかし、余りにも当たり前、余りにも平

凡で、とても信徒の「名誉」とか「大志」にはなり得ない。それでは大志的でないことをもって「大志と  
しなさい」（新英語訳）と言っているわけで、形容矛盾であると批評する学者もある程です。

先に申しましたように、当時の地中海世界は密儀宗教、禁欲的倫理、皇帝礼拝、そしてシンクレティズ  
ム（諸教混淆）など正に宗教の花盛りで、オルギア（ディオニュソスの秘儀に伴うような狂信、狂躁、耽  
溺、歌舞、痛飲など）の渦巻く世界でした。その中へ、パレスチナの片田舎にユダヤ教の異端として始ま  
った、いわば後発の新興宗教であるキリスト教が乗りこんでいったのですから、それら諸宗教の上を行く  
オルギアをもって布教するというのが常識でしょう。

ところがパウロの勧めは、およそその反対でした。自分の手で働いて自らを律し、人に迷惑をかけない  
品位ある生活を営め、静かな落ち着いた生き方をもってキリスト信徒としての名誉とせよ、というものでし  
た。それは他の諸宗教とは全く異なるエートス（ある社会集団にゆきわたっている道徳的慣習・雰囲気）  
でした。

もしこれを「宗教」と呼ぶならば、それはマルクスが批判したような「民衆の阿片」ではありません。  
人を酔わせるのではなく、人をしらふにする「宗教」、狂躁ではなく静謐せいひつを、「無秩序ではなく平和」  
（コリント1の14：33）をもたらし「宗教」です。パウロが宣べ伝えたイエス・キリストの福音はそ  
のような「宗教」でした。

## おわりに

「宗教とは何か」に答えようとして、信仰が生む「軌跡」（ヒルティの言葉）、すなわちそれがどのよ  
うなエートス、いかなる生活を生み出すものかを、パウロの勧めから考えてみました。

最後に、私の好きな詩人のひとりハリール・ジブランの詩「宗教について」をご紹介して話を終えるこ  
とにします。

ある老いた僧侶が言った。宗教のお話を、と。

彼は言った。

今日私が話したことは

それ以外のことであったでしょうか。

宗教とはすべての行為おこないと思惟かんがえではないでしょうか。

行為と思惟でないとするならば、

それは魂の中にたえずほとぼしり出る

畏敬と驚異の念ではないでしょうか。

手で石を切り刻んだり  
はたを織ったりする間も  
それはほとぼしり出るものだ。  
信仰を行為からひきはなすこと  
信念を仕事から別けることなど誰にできよう。  
目の前に自分の時間をくりひろげて  
これは神のため、これは私のため、  
これは私の魂のため、こちらは私の体のため、  
こういうふうに言えるひとがあろうか。  
あなたの時間はすべて翼つばさのようなもの。  
空間の中をはばたいて  
自己から自己へと飛んで行くものだ。

よそいきの衣をまとうように  
自己の徳をまとう者は裸はだかでいるほうがよい。  
風も太陽もその皮膚はだに穴をあけはしまい。  
倫理によって自己の行動を決める者は  
歌う鳥を籠にとじこめてしまう。  
もっとも自由な歌は  
牢獄の中からひびいて来はしない。  
礼拝をまるで窓のように思い、  
開けたり閉めたりする者は  
自分の魂の家を訪ねたことのない者だ、  
その家の窓は曙あけぼのから曙へと開かれているのに。

あなたがたの日々の生活こそ  
寺院であり、宗教である。  
そこに入るとき、何もかもたずさえて行きなさい。  
すきも炉ろも榎つちもリュートも、  
必要あって作ったものも

たのしみのためにこしらえたものも。  
なぜならじっと冥想しているときも  
自己の業績よりも高く昇ることはできず、  
自己の失敗よりも低く墮ちることはできないのだ。  
またすべての人びとを連れて行きなさい。  
なぜなら礼拝するときも  
人びとの希望<sup>のぞみ</sup>より高くは飛べず、  
彼らの絶望より身を卑くすることはできないのだ。  
神を知ろうとしても  
それゆえに謎をとく者となつてはいけない。  
それよりもまわりを見まわしなさい、  
すると神が子どもたちと遊んでいるのが見える。  
また大気を仰ぎなさい、  
すると神が雲の中を歩き給うのが見える。  
いなずまの中でみ腕をひろげ  
雨とともに降りて来給うのが。  
あなたはまた見るだろう、  
神が花の中に微笑み、木々の中で  
み手をあげさげし給うのを。

(神谷美恵子訳) 『ハリール・ジブランの詩』 (角川文庫、2003年)

(所載) 『聖書は語る—今井館日曜聖書講義—第2号「宗教とは何か」1997・1—3』

1998年8月